

体験談・官能小説 R-18

——その夜、板がざわめいた——

人妻沙耶を托卵寸前まで持ってた話 NTR

実話投稿板より

TOR-NET

R-18

©2026 TOR-NET

本作はフィクションです。実在の人物・団体とは一切関係ありません。

梅雨で毎日じめじめした夜が続いてるよな。32の独身、俺だ。隣のベランダから沙耶さん夫婦の部屋が丸見えで、窓のカーテンが少し開いてるせいで、部屋の明かりと動きがはっきり見えるんだ。今日は健二さんが会社から帰ってきたところで、沙耶さんがエプロン姿のまま笑顔で「おかえり」って寄りかかってきた。28の人妻で、カフェの店員やってるけど、黒い髪を少し乱したまま、健二さんのシャツの襟を直したり、首元に手を回したりしてる。健二さんが「今日も飯うめえわ」って言いながら沙耶さんの腰に手を回すと、沙耶さんがくすくす笑って「もう、汗臭いのにな」って言いながらも体を密着させて、ちょっと腰をくねらせるように寄り添ってる。普通の夫婦って感じがして、俺はベランダの椅子に座ったままじっと見てたよ。



窓が少し開いてるから、沙耶さんが「今日も遅かったね」って柔らかい声で言うのも聞こえる。健二さんが「すまん、残業多かった」って言いながら沙耶さんの首筋に軽くキスすると、沙耶さんが小さく息を漏らして「ん……」って反応して、でもすぐに笑顔に戻って「ちゃんと食べてる？」って聞く。出張先から送られてきた夕飯の写真を、沙耶さんがスマホで拡大して「これ、ちゃんと食べてるね、偉い」って嬉しそうに呟ってる声も、夜の静かさでかろうじて耳に入ってくる。沙耶さんの声が少し甘えてる感じで、夫の前だと急に女っぽくなる仕草が目について、黒い髪を耳にかけける仕草とか、腰に回された手から逃げないでむしろ体を預ける感じとか、なんか隙ありそうだよな。

夜の11時くらいになると、二人の影が重なって、健二さんが沙耶さんのエプロンの紐をほどこきながらキスを深くしてるのがぼんやり見えた。沙耶さんが小さく「ん……あ……」って息を漏らして、健二さんのシャツを握りしめてる。窓の向こうで、夫婦の匂いが残ってる部屋で、沙耶さんがまだ夫の匂いを体に残したまま、俺がどう動くか、ちょっと想像しちゃうよ。健二さんが5日から12日まで出張で家を空けるって、沙耶さんがベランダで電話してる時に overheard したんだ。あの夜の窓の向こうで、沙耶さんがまだ夫の匂いを残したままの部屋で、俺がどう動くか、ちょっと想像しちゃうよ。

002 名無しさん 沙耶さんのエプロン姿で腰くねらせるの毎日ベランダから見られて羨まwww 梅雨の夜に独身でそんな眺め最高www

003 名無しさん >>1 ベランダから沙耶さん夫婦覗くのはやめろ。俺の知り合いは似たような独身時代に警察沙汰になったぞ

004 名無しさん >>2 説教乙www 沙耶さんの出張話よりエプロン紐ほどくシーン語れよ 梅雨関係ねえだろ

005 名無しさん 沙耶さん…ベランダで電話…出張中…興奮する…

006 名無しさん 嘘松乙。ベランダから丸見えとか盛りに盛ってるだろ

007 名無しさん 出張中とか聞いちゃうと余計に想像膨らむわ…沙耶さん一人でいる夜とか

008 名無しさん >>1 ベランダから丸見えてマジ？今何してるかわかる？

009 名無しさん 警察沙汰とか言う奴いるけど、ただ見てるだけならセーフだろ

010 投稿者 >>8 窓の明かりついてるし、動きはぼんやり見える

011 名無しさん エブロン紐ほどくところから続き頼むわ

012 投稿者 >>3 ただの眺めだよ、別に動く気はない

実 況 台 本

んっ… 健二の唇が首筋に触れた瞬間、思わず小さく息が漏れちゃった。

エプロンの紐がゆっくりほどかれていく感触が、じんわり体に染みしてくる。

…やだ、こんなに優しくされると、胸の奥が熱くなって。

梅雨のじめじめした夜なのに、健二の腕の中はすごく温かい。

スマホがテーブルの上で光ってるのに、目がどうしてもそっちに行かない。

ん… あっ… 健二…

キスが深くなって、息が少し苦しい。

でも、この苦しさも、すごく好き。

夫の指がエプロンの下のシャツをまさぐって、肌に直接触れたとき、背筋がびくつと震えた。

(…この人となら、ずっとこうしていられる気がする)

そんな甘い気持ち、頭の中にふわっと広がっていく。

出張で五日も会えないと思うと、急に胸がきゅつとなる。

今この瞬間を、できるだけ長く味わいたくて、自然と体が夫に寄りかかっていく。

んっ… そこ、くすぐったい…

健二の息が耳にかかって、声が勝手に出てしまう。

指輪がちょっとずれて、冷たい感触が指に残る。

…健二が好き。

この腕に包まれてるってことが、すごく安心する。

他の誰でもなく、健二でよかったって、今この場で強く思う。

唇が離れた隙に、そう呟いてしまった。

はあ… はあ…

エプロンが床に落ちる音が、静かな部屋に響いた。

シャツのボタンが一つ外されて、肌が露わになるたびに、熱がじわじわ上がってくる。

健二の視線が真っ直ぐ私を見てて、逃げられないってわかってる。

(この人となら、どんなに恥ずかしくても、全部受け入れられる)

そんな気持ちが、胸の奥で確実に形作られていく。

もう、戻れない線を、静かに越えていこうな感覚。

健二の指が腰に回された瞬間、体が自然に反応して、夫の胸に額を押しつけた。

んっ… あっ… 健二… もっと…

声が震えてるのが、自分でもわかる。

でも、止めたくない。

この温もりも、この鼓動も、全部今ここにある。

スマホの画面が一瞬光ったけど、目がどうしても健二から離れない。

はあ… はあ… んっ…

キスがまた深くなって、思考がゆっくり溶けていく。

夫の体温と、自分の体温が混ざって、部屋の空気が少し重くなる。

この瞬間が、確実に私の中で何かを変えていくのを感じる。

…健二。

ただ、それだけを、息も絶え絶えに繰り返した。

>>9 まあ正論おじさんも「ただ見てるだけならセーフ」って言うてるし、実際今んとこはそれ以上じゃねえよ。ただよ、11時過ぎに沙耶が夫を送り出すところを窓の隙間から見てたら、なんか妙に生々しくてさ。

雨が小降りになって、じめじめした空気がベランダに這い込んでくる梅雨の朝だった。俺は部屋の明かりを消して、窓際に張り付くようにして外を覗いてた。玄関のドアが開いて、健二がスーツにネクタイ、黒いキャリーケースを引いて出てくる。沙耶はいつもの薄手のエプロン姿のまま、ドアのところで小さく体を折って「行ってらっしゃい」と手を振ってる。声は雨音に混じってぼんやりしか聞こえなかったけど、口の動きははっきり見えた。



健二が少し振り返って何か言った。沙耶は微笑んで「気をつけてね、大丈夫だよ」みたいな返しをしてる。普通の夫婦のやり取りだよな。健二がタクシー乗り場の方へ歩き去って、沙耶がドアを閉めた瞬間、肩がぴくりって落ちたのがはっきり見えた。エプロンの紐が少し緩んで、背中中のラインが浮かんでる。沙耶はその場で少し立ち止まって、深呼吸するみたいに胸を上下させてた。スマホの着信音が小さく鳴って、画面を見て夫からのLINEか何か見てたみたいだ。ベランダに出てきて、雨の音の中で画面を指でなぞりながら、ふっと小さく笑ったけど、その笑い方が妙に寂しげで、雨粒に濡れた髪の毛の先が肩に張り付いてる。

沙耶はスマホを胸に当てたまま、しばらくベランダの手すりに寄りかかってた。雨の音以外は何も聞こえない静けさの中で、彼女の吐息がちょっとだけ大きく聞こえた気がした。夫が出張で5日から12日まで不在ってことは、もう残り7日間、沙耶は完全に一人だ。夜になったらあの窓の明かりが、誰とも被さらずにずっと灯ってる。沙耶がベランダでスマホ遊びながら、時々こちらの方をチラッと見てるような気がしたんだけど、気のせいかな？ まだ何も起きてねえ。ただ「これから7日間、沙耶が一人」って事実が、頭の中でぐるぐる回って離れねえ。夜が来るのが待ち遠しくて、でもまだ何も動けないこの時間が、逆に興奮するわ。日常の何気ない夜に、窓に映る二つの影がゆっくり重なる光景が、妙に頭に残って離れねえ。

002 名無しさん >>13 沙耶さんの肩がぴくりって落ちた瞬間、スマホ胸に当てて深呼吸してる姿が妙に生々しいよな。7日間一人でベランダにいるって想像したらたまらんw

003 名無しさん >>7 肩がぴくりとか、窓の隙間からそんな細かい動きまで見えるわけねえだろ。盛りに盛ってるだけじゃん

004 名無しさん >>4(崩れ) 7日間とか数字出されても何も起きねえのに興奮すんなよwww

005 名無しさん 沙耶さん…7日間…ベランダで…一人…

006 名無しさん 正論おじさんもただ見てるだけならセーフって言うてるし

007 名無しさん 実際今はそれ以上じゃねえよな

008 名無しさん 以上って書いてあるけど続きは

009 名無しさん 雨の音の中で吐息とか盛ってるよな。窓の隙間からそんな細かいところまで見えるわけねえだろ

010 投稿者 雨粒と髪の毛の線は確かに見えたけど、吐息は気のせいかな

011 名無しさん 7日間一人っただけでここまで興奮すんなよ。まだ何も起きてねえじゃん

012 名無しさん ベランダの手すりに寄りかかってスマホ胸に当てる仕草、なんか妙にリアルでヤバい

013 投稿者 ただ寄りかかってただけだけど、肩の落ち方と一緒に映ってたから印象に残った

014 名無しさん 続きは？ 夜になったらどうすんだよ

015 投稿者 今んところはただ見てただけ。夜はまだこれからだ

実 況 台 本

……健二。

ごめん。

今、私、拓也さんの胸に顔を埋めてる。

夫の名前を呼びながら、他の男の匂いを吸ってる。

んっ……あっ……

拓也さんの手が、私の腰を強く押さえてる。

もう、逃げられないってわかってる。

この体、健二のものじゃなくなってる。

はあ……はあ……

拓也さん……もっと、奥まで……

声が勝手に出てる。

止めたくても、腰が勝手に動いてる。

健二に触れられたときとは全然違う熱が、下の方から上がってくる。

あっ……！　そこ、だめ……

でも、気持ちいい……

ごめん、健二。

私、今、こんな声出してる。

夫の名前を呼びながら、隣の男に犯されてる。

んあっ……あっ、ああっ……！

拓也さんの、熱いのが奥まで入ってくる。

もう、戻れない。

この感触、忘れられない。

健二のとは違う、太くて、熱くて、容赦ないのが、私の奥を抉ってる。

はあっ……はあっ……イク……

私、イっちゃう……

健二、ごめん……

今、私、拓也さんにイカされる……

あっ、ああっ……！　イクツ……！

……はあ……はあ……

体が震えてる。

拓也さんの精液が、私の中に流れ込んでる。

健二の子供を孕むはずだった子宮が、今、他の男の精でいっぱいになってる。

……もう、戻れない。

この瞬間で、私、健二のものじゃなくなった。

心も、体も、全部拓也さんに持ってかれた。

スマホの画面が、ぼんやり光ってる。

健二に送るための写真が、もう一枚、自動で保存されてる。

私はそれを見ながら、ただ息を吐いた。

健二……

私、もう、君の妻じゃない。

>>24 手すりに寄りかかってただけだよ。スマホを胸に当てて肩が落ちたのも一瞬だったし、盛ってるって言われても仕方ねえ。ただあの瞬間、雨の音の中で沙耶さんが深呼吸してるのが窓の隙間から見たのは事実だわ。

5日目の11時過ぎ、カフェのカウンターに沙耶さんが一人で立ってた。夫が出張で朝イチに出た直後で、店内はまだ開店したての静かさだった。俺はいつもの席からカウンター越しに沙耶さんの横顔を見て、コーヒー注文したときに軽く声をかけた。「出張中なんだって？ 沙耶さん一人で大変じゃねえですか」って。

沙耶さんはびっくりって肩を動かしてこっち向いた。エプロンの紐が少し緩んで、首筋に雨で湿った髪が張り付いてる。目が少し泳いで、苦笑いしながら「え、拓也さん……気づいてたんですか」って小声で返してきた。声が少し掠れてて、笑ってるのにどこか力抜けた感じが混じってた。

「7日間一人なんですよ……」って、沙耶さん自分から言ったんだよな。あの言葉が出たとき、カウンターの向こうで沙耶さんの指がレジの端を軽く押さえてた。雨の音が店外ですずっと降ってて、客もまだほとんど来てなくて、沙耶さんの吐息がちょっとだけ聞こえた気がした。まだ何もしてねえ。ただ「一人になる」って事実を口にした瞬間に、沙耶さんの目が一瞬伏せられて、喉が小さく動いたのが印象に残った。

正直、そこで終わらせとくつもりだったけど、沙耶さんが「ありがとうございます、気遣っていただいて」って頭を少し下げたときの、首の線とエプロン越しに見える鎖骨の影が妙に生々しくてよ。まだ触れてねえし、ただ声かけただけだ。でも沙耶さんが「7日間」って数字を自分で口にしたあと、俺の目を見て少しだけ視線を逸らしたのが……続きが気になるよな。



002 名無しさん カウンターで朝イチに声をかけた話とか5日目指定とか自演くせえわ。こんな一瞬の仕草まで書けるわけねえだろ

003 名無しさん >>29 俺も昔カフェのカウンターで同じような声かけられたけど、5日目とか数字まで覚えてねえよ。やっぱり自演だな

004 名無しさん >>30 静観とか言ってるけど、沙耶さんの鎖骨影の話こそ続きが欲しいわw 草

005 名無しさん 沙耶さんカウンターでびっくりって肩動かしたの…7日間って言葉で喉動いたの…w

006 名無しさん ベランダの話より店内の雨音のところがメインだな

007 名無しさん 続きkws

008 名無しさん 今日の電車遅延しててイライラするわ

009 名無しさん 沙耶さん関係ねえ自慢すんなよ

010 名無しさん >>24 5日目11時とか細かすぎて自演臭がエグいんだけど

011 名無しさん カウンター越しの鎖骨影とか、さすがに盛ってるだろ

012 投稿者 >>37 盛ってねえよ、ただ見てただけ

013 名無しさん 7日間一人って言葉で喉動いたとか、どこまで盛ってんだよ

014 投稿者 >>39 実際に見えたんだから仕方ねえ

015 名無しさん 続きはまだかよ、店内で何かあったのか

016 名無しさん 雨の音と首筋の湿った髪の毛のところが妙にリアルで草

017 投稿者 >>41 まだ何も起きてねえから続きはねえよ

実 況 台 本

イカされる……

あっ、ああっ……！ イクツ……！

……はあ……はあ……

体が震えてる。

拓也さんの精液が、私の中に流れ込んでる。

健二の子供を孕むはずだった子宮が、今、他の男の精でいっぱいになってる。

……もう、戻れない。

この瞬間で、私、健二のものじゃなくなった。

心も、体も、全部拓也さんに持ってかれた。

スマホの画面が、ぼんやり光ってる。

健二に送るための写真が、もう一枚、自動で保存されてる。

私はそれを見ながら、ただ息を吐いた。

健二……

私、もう、君の妻じゃない。

……拓也さんが撮ったの、ちゃんと残ってる。

私の顔、目がとろけてる。口も開いてて、声が漏れてる瞬間。

こんなの、健二に見られたら……どうなるんだろう。

でも、さっきまで拓也さんの胸に顔を埋めてた私。

「もっと奥まで……」って、自分から腰を動かしてた。

健二が5日目から出張って言ってたとき、寂しいって思っただけだったのに。

雨の日のカフェで拓也さんに声をかけられて、ちょっと話しただけなのに。

肩に触れられたとき、びくってしたのに、離さなかったのは私。

今、拓也さんの熱がまだ中で動いてる気がする。

流れ出してくる感触が、太ももを濡らしてる。

これ、拭かないと……でも、拭きたくない。

拭いたら、さっきのこと全部、なかったことみたいにしちゃう気がして。

健二の名前、出てくる。

メッセージ、開かなくてもわかる。

「元気？」とか「帰ったら何か食べよう」みたいな、普通の言葉。

それを今、こんな体で読むの、怖い。

でも、恐いの、画面をタッチしてる自分がいる。

……拓也さん。

私、健二に、もう何も言えない。

この精液が、私の中でちゃんと根付いたら……って思うと、

怖いのに、どこかで期待してる自分がいる。

健二の子供を孕むはずの場所が、今、違う男の匂いでいっぱい。

これ以上、戻る方法、ない。

もう、私、沙耶じゃなくて、拓也さんのもの。

……健二、ごめん。

でも、もう遅い。

この体、拓也さんに染められちゃった。

心も、きっと少しずつ、ついていってる。

ここまでが体験版です。続きは製品版で――

第2部では、音声実況の第1トラックをお楽しみいただけます。

サークル：TOR-NET